

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 1 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520402

研究課題名（和文） 統語計算における抽象格と形態格の役割

研究課題名（英文） The role of abstract and morphological Cases in syntactic computation

研究代表者

原田 なをみ (NAOMI HARADA)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：10374109

研究成果の概要（和文）：本研究では母国語話者の言語知識を形態格中心の言語（日本語）抽象格中心の言語（英語）に関して採取・分析し、抽象格と形態格がどの程度統語計算部門（および前者に関しては音韻部門）にてどのような役割を果たしていくのか考察した。二重目的語構文の分析を通して、形態格中心の言語では形態格付与に従事している語彙項目の格付与上の性質により、統語上義務的な移動が起こり、一方抽象格中心の言語では、形態格付与に従事している語彙項目は格付与に関与しないため、普遍文法の無標の動詞の格認可を受ける事が可能な位置に名詞句が生成されている限り、統語上の義務的な移動は起こらないということを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated the native speaker's innate linguistic knowledge on Case in two distinct types of languages (one employs morphological Case (e.g., Japanese), and the other employing abstract Case system (e.g., English)). The focus was on the role of Case in syntactic computation: How do the two different Case systems play a role in syntax? Through the analysis of ditransitive sentences and the so-called the "Double-Object Construction," the role of two kinds of Cases in core computation was clarified: The languages with overt morphological realization of Case are equipped with a "degenerate" dative marker, which is insufficient to license Case on the goal argument (merged as sister of the verbal head), undergoing obligatory movement to a higher position to have its Case licensed by T. In the languages without morphological Case markers, no such degenerate Case markers exist to begin with, thereby no Case-driven movement is induced and all the VP-internal arguments are licensed in a position where they are initially merged.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学・生成文法理論・統語論・日本語・格

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

名詞に固有の素性の一つとしての格の具現の仕方には、英語のように代名詞以外には格の違いが可視的でない抽象格と、日本語の格助詞のように独立した形態素として可視的かつ音形をもつ形態格がある。両者が同じ役割を果たしているのか、異なる役割を果たしているのか。また後者の場合は、抽象格と形態格の間の役割に重なりはあるのかどうか。母国語獲得の際の刺激の欠如と獲得される言語知識の複雑さの格差と、獲得される対象の一部である格のシステムに余剰があるという考え方は相容れない。そのため二種類の格は、理論上は文構造の構築、すなわち統語計算において、原則として異なる役割を担うと考えられる。Marantz 2000 は二種類の格の役割は統語計算において完全に分化していると提案しているが、その仮説の妥当性は、形態格を持たない言語の考察のみからでは検討できない。本研究代表者は、形態格を持つ言語である日本語の格助詞の交替現象を中心に、形態格に関する研究を継続して行ってきた。その研究の蓄積から得られた知見に基づき、統語計算における抽象格と形態格の役割分担の考察を通して、生得的な言語知識の構成について理論的に貢献することが重要だという認識に至った。

2. 研究の目的

生得的な言語知識の理論を構築する際に、単語を文構造に構築していく中心的な駆動力の1つに格素性がある。格には英語のように名詞に可視的な形で表されない抽象格と、日本語の格助詞のように、独立した語彙として存在する形態格の二種類がある。言語理論構築の基盤となっている印欧語の大半は抽象格として各素性が具現化するため、統語計算における形態格の役割を考察することが困難である。本研究では日本語や韓国語といった形態格が各素性の具現である言語の格にまつわる諸現象を、統語部門と音韻部門の双方から考察し、二種類の格が統語計算において果たす役割を考察し、言語知識の構成の理論化に貢献する。

3. 研究の方法

本研究は、ヒトの意識の内側にある言語知識を研究対象としている。そのため、物理的刺激に基づいた実験ではなく、研究従事者が文献などを読み込み演繹的思弁や討議を重ねていく理論的研究が中心となる。

母国語獲得中の子どもに対する刺激に含

まれる言い間違いがはっきり非文であると示されることはないから、母国語の分が文法的に適切か、という判断は、経験に基づくのではなく、生得的な部分である、という前提に基づき、成人を対象に文法的な文と非文法的な文を体系的に提示し、その文法性に関わる判断を研究データとして採取し、分析した。具体的な言語事象は以下の通りである。

① 情報構造 ② 代名詞の束縛 ③ 数量詞の解釈

4. 研究成果

本研究では、内省的な思弁を得て得られた母国語話者の言語知識を（1）形態格中心の言語（日本語・韓国語）（2）抽象格中心の言語（英語・中国語）（3）形態格（目的格など）と抽象格（主格）が両方見られる言語（トルコ語）の三種類の言語に関して採取・分析し、抽象格と形態格がどの程度統語計算部門（および後者に関しては音韻部門）にてどのような役割を果たしていくのか考察するものである。平成 22 年度は、上記目標と課題に従い、日本語のような形態格中心の言語データを再吟味し、英語のような抽象格中心の言語と比較しながら、分析結果の示す指標が統語計算および音韻部門のどちらにどの程度の比重で現れているかを考察した。

具体的には次の二点の考察を行った。(A) 日本語の複他動詞構文（例：太郎が二人の学生に三冊の本をあげた）の二つの内項（前述例の「二人の学生に」および「三冊の本を」）の統語構造における位置を、Ko (2005) の線条化アルゴリズムを用いて、遊離数量詞の可能性から再検討した。その結果、二格の内項はヲ格の内項より高い位置に生成されるという結果が得られた。(B) 二格の内項は二次述語（「裸で」「生で」など）による修飾を受けないことを統語テストを用いて示した。

(A) (B) の知見の下、日本語では二格がガ・ヲ格と性質を異にし、名詞の格素性を統語部門では完全には認可し得ないため、形態部門における格の認可に備える位置に名詞句を義務的に移動させるということを解明した。

平成23年度までに採取したデータに基づき、抽象格を用いる英語と形態格を用いる日本語において、格付与の領域である動詞句の構造の検討が容易な二重目的語構文（例 太郎が花子に花束をあげた）の構造を詳細に分析した。その結果、以下の点が明らかになった。

(1) 日本語では従来英語と異なり、間接目的語「花子に」より直接目的語「花束を」が動詞からより遠い、統語構造上では上の位置に生成されるとされてきたが、情報構造・再帰代名詞の照応・数量詞の解釈から、日本語は英語同様、間接目的語「花子に」は直接目的語「花束を」より動詞に近い、統語構造上では下の位置に生成される。

(2) 日本語で一見英語と異なる動詞句の構造を持つように見えるのは、日本語に格助詞「ニ」が、名詞句の認可をするのに十分な統語素性を備えていないことに由来する。

(3) 日本語のニ格に相当する語彙項目は、イラン語群のうちトルコで用いられているザザキ語などの言語の名詞句内の修飾語に付与される *ezafe* 助詞と同じ働きを持つ。

(1) - (3) に基づき、複他動詞を含む動詞の普遍的な構造として、動詞と間接目的語が階層構造の一番内側・下の位置に生じ、直接目的語はその動詞句の外側・上部に導入される構造を提案した。日本語ではさらに形態格(格助詞)「ニ」の性質上、名詞句の格素性を十分に認可できないことから、「ニ」格が付与される間接目的語が時制辞による格の認可を受けるために、統語構造の上部に義務的に移動するために英語との線形順序の違いが生じる。すなわち言語間の項の出現の順番の表面上の違いに、抽象格と形態格のどちらを用いるかという違いが関与していることを示した。

平成24年度までに採取したデータに基づき、抽象格を用いる英語と形態格を用いる日本語において、格付与の領域である動詞句の構造の検討が容易な二重目的語構文(例 太郎が花子に花束をあげた)の構造を詳細に分析した。その結果、以下の三点が明らかになった。

(1) 情報構造・再帰代名詞の照応・数量詞の解釈の考察より、日本語でも英語同様、間接目的語「花子に」は直接目的語「花束を」より動詞に近い、統語構造上では下の位置に生成される。

(2) 日本語で一見英語と異なる動詞句の構造を持つように見えるのは、日本語に格助詞「ニ」が、名詞句の認可をするのに十分な統語素性を備えていないことに由来する。

(3) 日本語のニ格に相当する語彙項目は、格の調和"concordial Case"を伴う。

この知見に基づき、複他動詞を含む動詞の普遍的な構造として、動詞と間接目的語が階層構造の一番内側・下の位置に生じ、直接目的語はその動詞句の外側・上部に導入される構造を提案した。日本語ではさらに形態格(格助詞)「ニ」が「格の調和」によって認可さ

れるため、時制辞による格の認可を受けるために、統語構造の上部に義務的に移動するために英語との線形順序の違いが生じる。すなわち言語間の項の出現の順番の表面上の違いに、抽象格と形態格のどちらを用いるかという違いが関与していることを示した。

上記の結果を学術誌に投稿し、得られた査読結果を元に以下三点を修正し、再投稿を行った。(あ)これまでの研究経緯を英語、日本語といった個別言語に言及しない形に修正。

(い)数量詞のデータ部分は紙面の制約上この論文からは削除(Miyagawa and Tsujioka (2004)への批判も含めて別の論文として執筆)。(う)日本語の与格と複他動詞構文に関する論文への言及を増補。更に提案した動詞句の構造を元に、日本手話のアスペクト構造の分析も行い、学会にて発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① 原田なをみ、2010、日本語の再帰代名詞の長距離束縛の阻害効果に関する一考察、日本言語学会 第141回大会予稿集、278-283. 査読なし。

② Naomi Harada, 2011, On the Structure of Ditransitive Sentences in Japanese. *Jinbun Gakuho*, No. 442, 33-42. 査読なし。

③ Naomi Harada, 2012, *How's and why's of how-words in Japanese*, *Jinbun Gakuho* No. 457, 39-48. 査読なし。

④ 原田なをみ・高山智恵子、2012、日本手話の達成動詞の完了表現に関する一考察、日本言語学会 第145回大会予稿集、70-75、査読なし。

⑤ Naomi Harada, 2013. Frozen scope in Japanese ditransitive sentences, *Jinbun Gakuho* No.472, 15-22. 査読なし。

[学会発表] (計6件)

① 原田なをみ、自然言語の研究：理論と実践、認知的コミュニケーションワークショップ 2010、2010年9月20日、静岡大学情報学部。

② 原田なをみ、日本語の再帰代名詞の長距離束縛の阻害効果に関する一考察、日本言語学会第141回大会、2010年11月28日、東北大学。

③ Naomi Harada, On the interpretation of "zibun": Its long-distance anaphoric and logophoric aspects, 同志社大学 文学部英文学科 コロキアム, 2010年12月18日、同志社大学。

④ 原田なをみ、自然言語の研究：理論的アプローチ、認知的コミュニケーションワークショップ 2011、2011年9月19日、静岡大学情報学部。

⑤ 原田なをみ、「知」の科学としての言語学、認知的コミュニケーションワークショップ 2012、2012年9月21日、静岡大学情報学部。

⑥ 原田なをみ・高山智恵子、日本手話の達成動詞の完了表現に関する一考察、日本言語学会 第145回大会、2012年11月24日、九州大学。

[その他]

ホームページ等

http://www.comp.tmu.ac.jp/ling_syn/

投稿中論文

① Larson, Richard and Naomi Harada. Datives in Japanese.

② Harada, Naomi and Richard Larson. Two-goal datives.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田 なをみ (NAOMI HARADA)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：10374109